仮面ライダーアマゾンズ ―HUNDRED's―

どんぐりあ～むず、

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《ハンドレッド》ー其れは地球を襲う生命体《サベージ》に立ち向かえる唯一の武器。

《アマゾン》ー其れはかつて対サベージ用生体兵器として、或いは人類の進歩と調和の為に開発された、ウイルスサイズの人工細胞「アマゾン細胞」を人間サイズにまで成長させた、２００００体以上存在する怪物。

此れは、アマゾンと、サベージ。そしてスレイヤー。三つ巴の戦い。

この物語は、其々の残酷な運命に立ち向かった人々の物語。

そして、同時に、この世界の命運を掛けた戦いの物語…。

だが、彼らはまだこの先に何が待ち受けているのかは分かっていない。

まだ、何も、分かっていない…。

※お久しぶりです！どんぐりです‼？遅くなって申し訳ありません！え？イリス箒じゃないのかよ？だって？すいません！まだ局面と精神面で参っているので暫く時間がかかります‼？申し訳ありません‼？なので今回は新作「仮面ライダーアマゾンズ―ＨＵＮＤＲＥＤ，ｓ―」をお楽しみ下さい‼？すいません‼？

※後、此れは全く同じことをプロローグの前書きにて書いているのですが、今回から暫くは普通に原作通りに進みますが、本作に限り、現

在進行形で進んでいる精神状態の悪化な作者の日頃のストレス発散の為に、相当オリジナル設定や展開、原作キャラ死亡やアンチヘイト（但し、飽くまで今後の予定です。）など、かなり過激なドス黒展開がてんこ盛りな作風となっています。ひょっとするとＲ１８スレスレな展開もあるかもしれません。今回はそのようなことは一切ありませんが、もし其れでも其れが嫌だという方は今直ぐ此処からブラウザバックをお願い致します。其れでも読みたいという方がいるのならどうか自己責任でお願い致します。以上、どんぐりからのお願いです。

※また、漏れタグとして「他作品キャラが改変されて登場」などもありますので御注意下さい。

目次

ヴァリアント覚醒／AMAZONS
プロローグ／BEGINS OF AMAZONS ―― 1
入学式／AMAZONS IN LITTLE GARDEN
16
宣戦布告／WAR DECLARATION OF AMAZONS ―― 28
協力者／AMAZON'S COMPANIONS ―― 44
特別編
特別編第一弾、ネタバレ注意！主要キャラクター3人若干のネタバレ紹回（後投稿遅れてすいません）‼？ ―― 56

ヴァリアント覚醒／ＡＭＡＺＯＮＳ

プロローグ／ＢＥＧＩＮＳ　ＯＦ　ＡＭＡＺＯＮＳ

…アマゾン、其れは未知の生命体。

……そして、全ての始まり…。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「なんで、どうして、こんなことに……」

少年はそう呟いた。先程まで自分のいるこの街は、多くの教会や寺院などの歴史的建造物や、近代的な造りの高層ビルが乱立し、観光客や礼拝を終えた僧侶や聖職者らや、通勤或いは通学途中の人々が行き交い、活気を帯びていた。

が。

それが今ではどうだろう？

突如放たれた眩い光と、全身に響き渡る程の爆音と衝撃波を伴った爆発によって街は一瞬にして地獄絵図と化してしまったのだった。

そして今も、断続的に光が迸り、爆発音が鳴り響いているというのがこの街の現状だった。

既に街の大半は、地面の上に積み上がった土埃の舞う瓦礫の山？一応鉄骨などの骨組みを露出、或いは其れだけという状態で辛うじて建っている建物は僅かながら存在していたが、原型をとどめているものがあるかという話となると、其れはほぼ皆無に等しかった？と成り果てていた。

「なんなんだ、なんなんだよ、いったいッ！」

少年は再び鳴り響いた爆音と、序でに起きた爆風に身を小さく屈めながら叫んだ。

少年には分からなかった。一体この街で何が起きているというのだろう？テロか、事故か、其れとも何か他の要因でもあるのか？

少年の周りにいた生き残っていた人々も其れは同じらしく、ある者

は悲鳴をあげ、またある者は気を動転させて混乱し、またある者は逃げ回るか、崩れた店舗から商品を略奪するか瓦礫に埋もれた人間達を懸命に救出しようと試みる者達などが、慌ただしく動き回っていた。
少年も、何が起きたのか、そして今自分がどのような状況に置かれているのかを確認しようと立ち上がった時だった。
直ぐ近くで、またもや爆発が起きた。
「うわっ⁉？」
巻き起こった爆風により、少年の身体はまるで木枯らしの中の枯葉のように宙を舞った。そしてその数秒後には、少年は瓦礫の山の上にたたきつけられていた。
（なんで、どうしてこんなことに……）
よろめき、キインとした耳の痛みをこらえながらもなんとか立ち上がろうとした少年の目に、真っ黒で幾何学的な黄色く輝く模様と、出来の悪い裁ちバサミを思わせるような巨大な鋏を持った二階建て一軒家ほどの大きさの怪物が、燃え盛る瓦礫の中から姿を現し、混乱していた人々に襲い掛かる光景が飛び込んできた。だが少年には、あの怪物の正体が何なのか、そしていったい何が起きたのかを理解することができた。
「うわあぁぁぁぁぁぁッ⁉？」
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁッ⁉？」
「逃げろぉぉぉッ、《サベージ》だぁぁぁぁぁぁッ⁉？」
《サベージ》。
かつて3年前、第一次遭遇（ファーストアタック）と呼ばれる事件が起きた。南極大陸に幾つもの小型隕石が落下したのだが、よりにもよってその中にこの謎の「異種生命体」、つまりサベージ達がいたのだった。サベージとは、個体によって違いがあるものの、概ね鋼のような皮膚に黄色く輝く幾何学的な模様や、昆虫や甲殻類などの節足動物を思わせるような目や長い触角、鋭い牙や幾つもの脚を持った、恐ろしい人食いの怪物のことだった。「だった」というのは、本来ならば国連や各国によって結成された連合軍や民間軍事会社（PrivateMilitaryCompany）、はたまた警察機関やその他企業によって駆逐、殲滅されたはずだったからだ。

だが、目の前の怪物と今の状況を見る限り、どう見てもサベージだと考えざるを得なかった。

少年は疑問に思った。何故こんなところに殲滅された筈のサベージがいるのだろう？国連や政府はタチの悪い「ウソ」でもついたのか？ウソか誠かといえば、今のこの街の状況もそうなるのであるが…。

少年が一瞬そう考えた時、目の前でサベージの巨大なハサミに捕まり、断末魔の悲鳴をあげて頭から、パキッパキッ、という音を立ててサベージに食われる男の姿が目に映った。其れを見た瞬間、少年の思考は一瞬にして疑問や猜疑から恐怖へと入れ替わった。

サベージの恐ろしさは、学校や本にニュース、はたまた両親や学校の先生などの大人達やインターネットなどから得た情報から痛い程分かっていた。そのうえ目の前で人が喰われるという世にもおぞましい光景を目にしてしまったのだ、恐怖で腰を抜かして尻餅をつくなと言われる方が、どだい無理な話だった。

だが、それでも少年はこんなところで腰を抜かして死ぬわけにはいかなかった。とても大切な約束を、其れも絶対に破る訳にはいかない約束を、〝あの子〟としていたからだ。

ー其れを果たすまでは、オレは、恐れたり、死んだりすることなんて、出来ない…。出来る筈が、無いんだ…！

少年は走り出した。約束を果たす為に、行かねばならぬ場所へと向かう。死の恐怖はアドレナリンや、火事場の馬鹿力で明後日の方向へと追いやった。此れで暫くはサベージに出くわしても上手く撒いて逃げ切って、あの場所に辿り着けるだけの時間は稼げるだろう。もしかすると、上手くこのサベージの作り出した地獄から〝あの子〟と共に逃げ切れるかもしれない。

少年の心に、僅かながらも光が差してきた。〝あの子〟と共に此処から生き延びて帰るのだと、自分に言い聞かせ、己を奮い立たせていた。今は何としても、此処から生きて帰るのだと、己に希望を持たせた。

少なくとも、今は。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

やがて少年は目的地である、この街の中心部に位置する公園にやって来た。何時もであれば多くの市民や観光客で賑わっているのだが、やはり付近での騒ぎを聞いたのか、殆どの人間は公園から姿を消していた。

少年は祈った。願わくはもし人々がサベージから避難したというのならどうか〝あの子〟も一緒に避難していてくれますように、と。

だが、其れも公園の奥にあるベンチの上で、座ったままスヤスヤと寝息を立てる銀髪の少女の姿を見て、其れは甘い考えだったと認識した。

何時ものように、フリル付きドレスを着、何時ものように、公園の奥のベンチに座り、然し何時もと違い座ったまま寝息を立てて寝ている、銀髪の〝あの子〟。

先程まで、昼寝をするには最高な陽気だっただけに、少年を待つ内に眠ってしまったのだろう。少年には、その様子が絵本に出てくる白雪姫などの眠り姫を思わせた。出来ればもう少しその様子を見ていたかったが、今は非常事態だ、早急に此処から離れなくては。

少年は少女の元に駆け寄り、両肩を掴んで身体を揺すって呼び掛けた。

「起きて！ねえ、早く起きて！」

するると、少女は目を覚まして、

「あ、おはよう。やっと来たんだ。」

と、にこりと笑顔を浮かべた。が、直ぐに少年の気配や周りの様子から、何やら切羽詰まった状況だな、ということに気づいたのだろう。彼女は不思議と不安の混ざった表情で首を傾げ、少年に訊いた。

「……どうしたの？」

「大変なことになってるんだ！サベージが、この街に現れて！」

其れを聞いた少女の顔から不思議そうな表情が消え、あっと言う間に顔面蒼白したのと、少年達を巨大な影が覆ったのは同時だった。

サベージが、少年を追い掛けてきたのだ。

「逃げよう！」

未だにサベージが街に現れたことが実感出来ないで戸惑っている少女の手を引いて、少年は走り出した。だがその行く手も、空から降ってきたもう一体のサベージによって阻まれてしまった。

公園の池から水が溢れる程に、大地が揺れた。

「……ッ、くそっ！」

前門のサベージ、後門のサベージ。

退路を完全に失ってしまった。

そのうえだいたい３～４ｍ？普通の二階建て家屋ぐらいか??くらいの大きさの巨体だ、両側から迫る壁に押し潰されそうな気分に陥るくらいその圧迫感は尋常なものではない。

おまけに目の前のサベージがギョロリとした双眸を少年達に向け、立ち上がってきた。明らかに少年達に狙いを定めているのは目に見えていた。

少年は少女の手を引いたまま大地を蹴り上げた。早く逃げなければ、あの男のように２人揃ってパキパキと喰われてしまう！

「こっちだ！」

少年の咄嗟の判断で、どうにかサベージのハサミ攻撃を交わすことは出来た。ハサミが地面に突き刺さり、砂埃が舞う。然し再び走り出した時、少年は、「きゃっ⁉？」という悲鳴を聞くのと同時に、背後から思い切り腕を引っ張られ、握っていた手が離れる感覚に気がついた。振り返ってみれば、少女が瓦礫に足を取られて転び、地面に倒れてしまったのが見えた。

「大丈夫かっ⁉？」

「う、うん……、大丈夫……。」

そう言って少年に助けて貰いながら少女がその身体を起こそうとしたまさにその時だった。

パカリ、と背後のサベージの頭が開き、其処へ白い光が集まり始めたのだ。少年は思い出した。サベージはただ人喰いをしたり、ハサミで攻撃してくるだけではない、頭部からも破壊光線を放つということを聞いたことがあったのだ。もし情報が正しければ、此れまでの爆発や強烈な光は、全部此れのせいだった筈だ。

「伏せろっ！」
勢いよく少女と共に身を屈めた瞬間、強烈な日光にも似た光が迸り、辺り一面が真っ白に染まった。
「くあっ……！」
轟音と共に爆風が起き、瓦礫や砂埃がまう。
其れは少年達も例外ではなく、２人はあっという間に吹き飛ばされてしまった。
だが少年がすぐ傍の瓦礫に打ち付けられたのに対して、少女の方は別の方向にいるサベージの足元へゴロゴロと転がってしまった。
サベージも其れに気が付いて、ハサミの狙いを少女に定めて、遂には少女のその華奢な身体は大地を離れ、サベージのハサミによってクレーンゲーム宜しく引き上げられてしまう。
「やめろぉおーーーッ！」
少年は絶叫した。サベージの頭がパカリ、と開いて少女が喰われそうになるのを見ながら、少年は焦燥と絶望に襲われた。どうすればいいんだ？最早、此れまでなのか？俺たちは此処で、終わってしまうのか？
少年は少女が喰われるところを見ぬよう、顔を背けた。

「グゥオアアアアアアアアッッッ！」

何かの雄叫びと共に、ズバァッ、ドサリ、ドシャアアアッ、という音が聞こえた。
何事かという思いで、少年は少女を捕食しようとしていたサベージの方を向いた。見ると、少女の身体を挟んでいた方のハサミの腕が無くなり、代わりに黄色い体液がまるで噴水のように噴き出していた。無くなったハサミの腕は地面に落ちていて、サベージは金切り声を上げて、自分の腕を斬り落とした犯人を探していた。もう一体のサベージも、何が起きたのか理解出来ないでいるようだ。

「なん、だと…。い、いったい、何が…。」
少年も、今何が起きたのか分からぬ身であった為、辺りを見回した。そういえば、サベージのハサミの中にいた〝あの子〟は何処だ？サベージの片腕はあってもあの子だけはいなかった？まさか…。
その時だった。
「グゥオワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！」
先程よりも迫力のある、鼓膜を切り裂き、腹から奈落の底にまで響きそうな野太い咆哮がこだました。
その咆哮のした方へ目を向けた時、少年は思わず己が目を疑った。
まず目に入ったのは、毒々しいエメラルドグリーンを思わせる新緑だった。そして全体的なシルエットは人間と変わらないようにも見えたが、似ているのはシルエットだけだ。後は黒いトゲの生えた腕や足、赤い背鰭に赤い複眼、小さな鼻の穴や緑色の角が３つ、頭に生えていて尚且つ額にも角が一本生えていた。そして何よりも、人間ならば耳まで裂けているであろう、ギザギザの顎。そして何よりもその怪物は、全身から猛烈な蒸気を放っていた。少し近寄っただけでも、火傷しそうな様子だった。
どう考えても、人間の筈がなかった。かといってこんなにも特徴がサベージとも違い過ぎるから間違いなくサベージでもない。少年は困惑した。この怪物は一体何なんだ、どう考えても都市伝説とかに出てきそうな、所謂「トカゲ人間」としか呼べ様のない奴じゃないか、と。
その時、少年は怪物の手が、サベージの体液で濡れていることと、その腕の中に〝あの子〟がいることに気がつき、あの怪物が少女を助けたのだということを瞬時に理解した。
「あっ⁉？」
少年が驚愕のあまり声を上げ、怪物に少女のことや、サベージのことを訊こうとした時には、既に怪物は、崩れた噴水から少年の直ぐそばにまで来ていた。
其れまでに、１秒もかからなかった。

怪物はその赤い目で少年を見た。少年は間近で見る怪物の姿に恐怖しながらも、何とか一句一句言葉を紡いだ。
「助け…て、くれた、のか…？」
すると怪物はその腕の中の少女を少年に託した。そして自らはサベージへと向かって飛び掛かった。
「グワァァァァァァァァァァァッッッ！」
その様子を尻目に、少年は腕の中の少女を見た。が、其処で彼は一瞬にして青ざめた。何故なら胸元が、ドレスごとハサミに引き裂かれていたからだ。肌には、一筋の赤い線が引かれていた。サベージは、少女の美しくも華奢なその身体に、傷を残していた。
「おいっ、大丈夫か⁉？」
声をかけると、苦痛に喘ぎ、掠れた声を喉から漏らしつつも、ゆっくりと頷いた。まだある程度の意識はあるようだ。
（くそっ、早く血を止めないと……）
少年はサベージが怪物によって足止めされている今しか、この状況から抜け出す方法は無いと考え、少女の身体を抱えて、全速力で走り出そうとした。だが、
「くあっ、はあっ……んうぅっ……」
その時だった、少女の口元から苦悶の声が漏れた。呼吸も先程よりも浅くなり、玉のような脂汗まで掻き始めた。
「……って、なんだ、これ……」
其れに気付いた少年は、少女の切り裂かれた胸元からを中心に、皮膚が浅黒く変色し始めたことに気がついた。然も、変色の範囲は留まるところを知らないようだった。
（まさかこれって…、毒か……？）
少年は頭を巡らせた。もし此れが毒ならこれ以上少女の命が持たないのは明白だった。どうすれば…。
その時、少年の脳裏に昔の思い出が蘇った。遊んでいた時に蜂に刺されてしまった時、母親が傷口の近くを縛り上げて毒がまわらないようにし、口で吸い出してくれたのだった。然し、あの時は腕だから良かったものの、今回は胸元だ。縛り上げるようなことは出来ないか

ら、吸い出すなら一刻も早く吸い出さなければならないだろう。
（傷口から、毒を……）
　他人の、其れも異性の肌に唇で吸い付くなど、此れまでに一度もない。ましてや、人の命を救ったことすらもない。
　其れだけのことであるから、息が詰まり、心臓の鼓動も早まり、喉も渇く。然もそれ以上に、命が懸かっているのだ。少年は自問した。出来るのか、この俺に？彼女の肌に唇を吸い付けることは愚か、そんなことで彼女を救うことが、本当に出来るのか？、と。
　だが、もう一刻の猶予もない。迷っている暇など無いのだ。
（ごめんっ！）
　心の中で少女に謝罪し、少年は少女の傷口に吸い付いた。
「んっ……ふうっ……んんっ……」
　少年は必死に唇を窄めて毒を吸い出しながら、錆びた鉄の味とその中に混じる異質な、苦味のある味を感じた。
「ん？はあっ！」
　ペッ、と口から吐き出した浅黒い液体がコンクリートにべちゃりと付着した。
　其れでも少年は、めげることや恐れることなく、再び少女の胸元に吸い付いた。２回、３回…。そして３度目だった。
「あり、がと…。」
　漸く少女の呼吸が落ち着いてきた。少年は安堵のあまり噎せ返った。
　だが、安堵も長くは続かなかった…。
（なんだ、これ…？）
　いきなり目の前がぼやけてきた。おまけに視界も揺らぎ、頭もふらつき始めた。
　目を擦ってもそれは治らない。
（くそっ、どうなってんだよ！）
　首も重くなり、身体も地面に吸い寄せられ始めた。意識も朦朧としてきていた。そこで少年は、この症状が吸い出した毒によるものではないかと考えた。サベージの毒は思った以上に強力なものだったよ

うだ。
（ちくしょう…、こん、な、ところ、で……）
少年は悔しさを表情に滲ませた。だが、少女の方は既に小康状態にまで落ち着いているように見えた。
？願わくは助かりますように…。
少年はそう念じ、最早自分は助からぬ、と覚悟を決めた…、

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッッ‼？」

その時だった、すざましい程の雄叫びと、側に核爆弾でも落ちたのかと思うくらいの爆音が響いた。
見れば、あの怪物が空高く舞い上がって、瀕死のサベージに飛び掛かり、とどめを刺していた。飛び上がり、サベージの上に叩き潰すように着地すると、すざましい衝撃波が襲いかかった。

「うわあああぁっ‼？」

悲鳴こそ上げはしたが、朦朧としながらもその場にあったコンクリート片の内側に身を置いた為、今度は吹き飛ばされずに済んだ。その時、少年達は気絶しかける程のふらつく思考の中で、漸くサベージが現れたことよりも異常な事態が起きているのでは、と考えるようになっていった。本当なら其処まで気にしていられる程、今の自分達の状態ではそんな余裕はなかった。だが、気絶する五分前に達していた彼らは見たのだ。

怪物が、サベージを〝生身で、然も素手で殺し、然もその肉を喰らっ

ていた〃、ということを。

だが、そんな怪物も五体満足にはいかなかったらしい。ぼやけて、然も意識も混濁している少年と少女の目には、怪物は片腕を失って、全身から緑黒い体液らしき液体を流して苦しそうにしているように見えた。だが其れでも一心不乱に怪物はサベージを喰らっていた。其れは最早、見た目同様、「獣」としか呼べ様のない有り様だった。

だが、不意に怪物が〃食事〃をパタリと辞めた。そして、ゆっくりと少年達の方へ向く。

「……え？」

少年の間の抜けたような声が漏れた瞬間には、怪物は彼の肩に食らいついていた。

「あああぁあああああああぁぁあぁあああああああああぁぁぁぁぁぁツツツツツ‼？」

先程迄のふらつき、ぼやけて見えた視界や思考は、暫くは続いた長い絶叫とすざましい激痛と共に、明後日の方向へ飛んでいってしまった。然も、少年は気づかなかったが、少年の身体の中に侵入してくるものがあった。サベージの毒とは違う、何かだ。〃それ〃は少年の細胞を包んだ。そして〃それ〃は急速に広がっていく。だが少年は其れに気づかず、このままこの怪物に喰われて死ぬのだと考えていた。このまま、自分は激痛に苦しみ、この怪物に貪り食われて死んでいく

のか？サベージの毒の方がまだマシに思える、こんなとんでもない殺され方をして？彼女共々、この怪物の餌にされて？

少年がそう考えたとき、「けほっ、けほっ…」と咳き込む声が聞こえた。見ると、先程の衝撃波で気絶していたと思われた少女が、息を吹き返して咳をしていた。だが其れを見た怪物は、少年の肩を咥えていた口を離し、ゆっくりと少女に近づき始めた。其れを見た少年は、息も絶え絶えに、肩の痛みとぶり返してきたふらつきを堪えながらも、血相を変えて怪物に飛び掛かろうとした。

「やめろ、其れだけは、其れだけは…、絶対に…、やめろぉおおぉ！」

うわあああぁっ、と声を上げて少年は怪物に向かった。だが怪物は後ろ回し蹴りを少年のこめかみに命中させた。

少年は盛大に吹っ飛ばされ、近くの瓦礫の山に突っ込んだ。哀れ、少年は虫の息に陥った。今度こそ死ぬかもしれない、少年はそう考えて暗闇の中に落ちていった…。

最後に、怪物が少女の傷口に噛み付く光景を、網膜に焼き付けて…。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「……はっ⁉︎？」

如月ハヤトは其処で目を覚ました。先程まで眠っていた彼は、またしても何時も見る〝あの子〟が出てくる夢を見たのだ。幼い頃から見るようになった、ブリタニア連邦、グーデンブルク王国で起きた、

第二次遭遇（セカンドアタック）の最中で起きた、ハヤトと、謎の少女、そして…。
「うぐっ…!!?」
　ハヤトは其処まで考えて、思い出そうと、考えようとしていたことが、自分にとっては想像しただけでかなり不味いことになるものだったことを発作による心臓の痛みで思い出し、直ぐに考えないよう被りをふり、太陽の光が差す窓へと顔を向けて、呼吸を整えた。危ないところだった、もう少し遅ければ今頃は…。
「いや、其れも考えねえ方がいいな…。」
　まだ呼吸が乱れてはいたが、空の景色を眺めて何とか体調を整えた。
　耳に付くのは、この輸送機のジェットエンジンと、気流の音だけだ。ハヤトは今、とある目的の為に、とある場所へと向かっていた。
　海上学園都市艦、リトルガーデン。
　病弱な彼の妹、如月カレンが入院している病院がある、巨大民間軍需企業「ワルスラーン社」と、共に世界のトップに立つ医療企業、「野座間製薬」によって運営されている対サベージ用拠点にして、武芸者（スレイヤー）育成機関も兼ねた、総面積４平方キロメートル以上もある、街を持つ巨大な空母。天候や出国手続きの問題で、前日の夜から入学式当日に到着する予定になってしまったものの、もう少しすれば着いてしまうだろう。
（然し、またあの子の夢を見たな…。）
　ハヤトは、あの少女のことが知りたいと考えていた。グーデンブルク王国がセカンドアタックに見舞われた際、彼は両親を亡くし、自身も頭への怪我や、〝その他諸々〟の要因で大半の記憶を失っていた。
　何故詳しく言えないのかというと、彼自身や彼の周りの命に関わるからだ。其れは、彼の左腕の、腕輪型の機械が全てを物語っている。幾らこの腕輪が、彼の中にいる「モノ」を抑制できるとある「特殊な薬剤」を投与しているとはいえ、夢の最後を想像すると自分の意思とは関係無く服を破いて勝手に「変身」してしまうのだ。此ればかりは、彼にはどうにもならなかった。
「……そーいや、駆除班の皆、どうしてるかな…。」

ハヤトは、今頃は自分とは別の場所にて待機している仲間達のことを思った。出来ればカレンと共に早く会いたい。自分にとって、彼らは実妹のカレン、同じ施設で暮らしたセカンドアタックの孤児達と同じくらいかけがえのない、両親を失って以来出来た「家族」なのだから…。

（ま、兎に角先ずはカレンに会うのが先だな…。時間が時間だから、入学式より前に会えれば良いんだが…。）

そう考えた矢先、輸送機が雲間に入った。そして見れば、巨大な空母が目に入ってきた。

漸くリトルガーデンに着いたらしい。ハヤトはやっとかという思いで、シートに凭れ掛かった。

そして目を閉じて、リトルガーデンにて自分がしなければならないことを反芻し始めた。

幼い頃から病弱な妹により良き治療を行うために。

共に施設を過ごした、困窮した生活を送る仲間達を救う為に。

そして…。

（俺の、夢の答えを、探す…。）

あの夢の中に出てくる少女が誰なのか。そう考えるのは、初めてハンドレッドに触れた日と、当てのない駆除班の日々を過ごすうちに昔の記憶が蘇りつつあるのだ。勿論、あの夢の中に出てくる、怪物のことも…。

（ヤバイヤバイ…。まだ想像するのは無理みたいだな…。けど…。）

ハヤトはもう一つ、自分がリトルガーデンに向かわねばならぬ理由を思い出した。彼の所属する野座間製薬の子会社に当たる、害虫駆除企業「ノザマペストンサービス」の調査班が、大量の〝虫〟がリトルガーデンに侵入したらしいこと、そして、とある人物の要請により必ず補充要員として保護して欲しいという〝虫〟がいる、という情報をリークしたのだ。だが〝虫〟達のことをリトルガーデンの住民に知られる訳にはいかない。例えその上層部である「生徒会」にも…。

よって、ハンドレッドの反応数値が驚異的に高く、注目の集まりや

すいハヤトは、元の駆除班のメンバー達とは別行動となったのだった。
「リトルガーデン…。今日から俺、いや〝俺たち〟の暮らす場所。俺の夢の答えのある、〝あの子〟に会えるかもしれない場所。そして…、俺たちの、サベージと…、〝虫〟…、〝アマゾン〟達と、戦う場所…。」

ハヤトはそう独りごちた。

此れは、アマゾンと、サベージ。そしてスレイヤー。三つ巴の戦い。この物語は、其々の残酷な運命に立ち向かった人々の物語。

そして、同時に、この世界の命運を掛けた戦いの物語…。

だが、彼らはまだこの先に何が待ち受けているのかは分かっていない。

まだ、何も、分かっていない…。

入学式／ＡＭＡＺＯＮＳ　ＩＮ　ＬＩＴＴＬＥ　ＧＡＲＤＥＮ

…僕は、怪物だ。

……僕は、知らぬ間に人間ではなくなっていた。

ハンドレッド、延いてはヴァリアントによって導かれ、漸く僕は思い人に再会できた。其れは僕にとって、人生で一番？其れだけではないけど、その時一番嬉しいって、感じたことかな……？幸福な瞬間だった。けど…、

けど其れは、想像を絶する戦いの始まりでもあり、罪を背負い続けることになる道を歩いて行くさだめに踏み込むことになる選択をとってしまうことになり、何より僕自身や、僕や、ハヤトや、皆の運命や、そして何もかもを永遠に変え、様々な悲劇を幾つも生み出してしまった。

其れでもなお、僕は咎人として同胞を狩る。仲間を狩る。生きとし生けるものを狩る。狩り続ける。

…………〝アマゾン〟として。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「おお、想像以上にデカいな……。」

　如月ハヤトはリトルガーデンに着陸した輸送機のタラップの上から、現在海上に停泊中のこの巨大な空母の全容を見て呟いた。遠くには街らしきものやミラードームのようなものも見える。

　もし鼻につく潮の香りさえなければ、この場所が海上の空母だということに誰も気付けないだろう。

「さてと、時間はと…。」

　ハヤトは、腕時計を見て、入学式までに妹、如月カレンのいる病院へ向かって会いに行き、其れまでに寮へ向かい制服に着替えるというプランで入学式に間に合うかどうかを計算した。だが、

「……やっぱ無理かなぁ、カレンとこに行くのは。どう考えたって時間がねぇし、其れに入学式に遅れたってなると、どうなるか分かったもんじゃあないしなぁ…。」

　ハヤトは、一先ずカレンに会いに行くことは今は諦めるしかないと考えた。良く良く考えてみれば着艦後に空港（エアポート）に行って一通りの手続きと、制服以外に必要な物品の受け取りをしなければならないのだ。其れに、空港で制服に着替えて、寮へ荷物を置いて貰えるのだったという話も、たった今思い出した。

「……あ~~、ごめんな~、カレン…。どう頑張っても兄さん最初にお前んとこに行けそうに無いみたいだ…。」

　ハヤトはそうリトルガーデン内の病院のある方向に向かって謝る

ように呟いた。

「……仕方ない、取り敢えず先ずはエアポートに向かって…、って、いいっ⁉？」

ハヤトはタラップから降りようとして辺りを見回した際に、其処で目に入ったものを見て引き攣ったような悲鳴を上げた。何故ならエアポートらしき建物の上、展望台の手すりからこのような垂れ幕が掲げられていたのだ。

【熱烈歓迎♡如月ハヤト君！】

掲げられた垂れ幕が潮風に吹かれてはためく中、不意に拡声器の電源を入れた時のキインとした音が聞こえ、其処から女学生らしきあどけないソプラノの領域に立つ２人の少女の声が、拡声器によりその美声が台無しになる位に発着場全体にキンキンと響き渡った。

『えー、ハンドレッドの反応数値が歴代１位の、如月君！如月ハヤト君！何処にいますかぁ～～？』

『居たら元気に返事をして下さぁい…。』

輸送機の影に隠れたハヤトは溜息をつくと、顔に手を当てて頭を抱えた。着いて早々、面倒なことになったなぁ…。

ふと、ハヤトは彼女達と垂れ幕の下を通り過ぎようとしている、コンテナを三つも運んでいるトレーラーの存在に気づくと、

タラップから少女達からは死角になるトレーラーの左側のコンテナの側面へと、一気に飛びついた。

勿論少女達が其れに気づくことはなく、拡声器のスイッチが切り忘れたままハヤトを探し回っていることを周りに聞かせまくっているのを尻目に、ハヤトは安堵の溜息を漏らした。
「ごめんな…、悪りぃことしちまったけど、確かに俺を仲間として迎え入れてくれることはとっても嬉しいよ。有難いし、本当に嬉しい…。けど、俺みたいな奴には…、そんなに歓迎されることなんて、何一つ無いんだ…。」

そう言ってハヤトは、遠ざかってゆく展望台の上の少女達を、悲しげに見つめた。
そして、シャツの袖下に隠れている自分の左腕を見やる。

其処には「人間、如月ハヤト」としての存在を生かすためのある種の生命維持装置となる腕輪が取り付けられていた。

〝アマゾンズレジスター〟。

ハヤトにはこの忌々しい腕輪が何の為に付いているのかは分かっていた。

外すと自分がどうなってしまうかも。

だがこのことを知るのはワルスラーン社と野座間製薬、そして当事者たる自分自身だけだ。自分がアルバイトの名目で所属させられているノザマペストンサービス駆除班のメンバー達も、腕輪にはＧＰＳ機能が付いている、ということだけしか聞かされていない。ハヤトが自身や虫、即ち「アマゾン」のことや野座間製薬に何が起きたかなどのことをメンバーに話すと、自身も人喰いすらしていないにも関わらず忽ち駆除対象にされ、その上メンバー達も即座に全員解雇する、という規則と契約のせいだ。

だからこそハヤトは時折、幾ら上からの指示とはいえ、伝えたいことを自分に対して家族のように接し、信用してきてくれる彼らに伝えてはならないことには、常に罪悪感と後ろめたさを感じていた。この前の金曜日にヤマト皇国のとある地方旅館にて行われた駆除活動の後、アマゾンのことを聞こうとしたメンバーらが脅された時には、その思いは益々深まった。

だからハヤトは、自分は、どれだけ能力や才能があって持て囃されようと、どれだけ信用に値すると言われようと、上からの指示に逆らうことの出来ない、〝最低なペット〟だと言い聞かせてきたのだった。

両親が死に、自分が〝アマゾン〟と化し、サベージとアマゾンに復讐を誓った、あの日から…。

「……ヤベッ、腹、減ってきた……。」

そう言ってハヤトはコンテナに捕まったままバッグの中から、チーズバーガーの包み紙を取り出してその中身を食べ始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「……本部長、たった今、ワルスラーンから連絡が入りました。…如月ハヤト君が漸く、リトルガーデンに到着したようです。」

ヤマト皇国、野座間製薬本社ビル「特殊研究開発本部長室」。

一面ガラス張りで、冷たく無機質な花崗岩の床や、黒く頑丈だが、しかし質素なデザインのデスクと椅子、白い壁や上層階に繋がる螺旋階段や、部屋の一面を覆い尽くさんばかりの大きさの大型スクリーンなどが完備されたオフィスは、その部屋を使う者の性格を如実に現していた。

水澤玲華。

このオフィスにて、現在野座間製薬特殊研究開発本部が行っている「アマゾンプロジェクト」の全体の指揮と対処などを行っている人物であった。そんな彼女は今、大型スクリーンに映されている前回のアマゾン駆除の様子を記録した映像?ハヤト達が所属する、野座間製薬の対アマゾン駆除用の為に作られたカモフラージュ用下請け企業「ノザマペストンサービス」駆除班が、ヤマト皇国のとある地方旅館にて行った、旅館にいた全員を喰らったランクDの「クモアマゾン」駆除の様子を記録したものだった。なお駆除班員全員には、彼ら自身では切ることの出来ない無線イヤホンマイクや、ライブビデオカメラが装着されたヘルメットを着用することが義務付けられている?を見ながら、彼女の秘書であり、何時も何を考えているのか分からないいくらいに無表情である?その為、ノザマペストンサービス駆除班からは「ノウメン」のあだ名で呼ばれていた?、加納省吾の報告を聴き入っていた。

「……そう。良かったわ。天候不順と出国手続きでゴタゴタしたから、その間に情緒不安定に陥ってしまわないかと、心配していたのだけれど…、無事に着いたのなら、もう心配無いわね。」

そう言うと彼女は、手にしていたリモコンで、とある理由によりペストンサービス駆除班に所属している「モグラアマゾン」がクモアマゾンの身体から脈動する心臓のようなものを抉り出しているところを映していたスクリーンの電源を切った。

「……然し、良かったのですか？幾らアマゾン細胞と〝ヴァリアントウイルス〟の両方の制御に有る程度成功し、元人間で人を襲うことも無いと言われているとはいえ、今はアマゾンである如月ハヤト君を、保護者無しで大量のアマゾンが潜伏しているかもしれないリトルガーデンに到着させるのは……。」

「彼は定期検査でも合格していたし、レジスターも関係者には伝えてあるから、滅多なことが無い限り、外し外されたり、壊されることも無いわ。薬剤切れなんて先ず起こりえない。万一暴走したなら輸送機もリトルガーデンに着く前に海に落ちていたことでしょう。其れに…。」

「其れに？」

「……彼方には、リトルガーデンのメインコンピュータである〝ＬｉＺＡ〟と優秀な研究者達、其れに件のアマゾンを管理している〝協力者〟もいるのよ？いざという時に、駆除班以外でなら頼りになれるわ。……勿論、失敗した際にはそれ相応の責任は取って貰うけれど。」

玲華はそう言うと、デスクに座り、駆除班から提出された先程のクモアマゾン駆除の報告書を読み始めた。

「……成る程。確かにそう言われれば納得です。然し、其方の事案は良いとして、役員からはここ2年のアマゾン駆除の目立った成果があげられていないとの理由で、予算の削減を求めてきています。」

そう言って、加納は持っていた革製の黒カバンからタブレット端末を取り出し、玲華に渡した。どうやら幹部役員らの出した予算削減を求める書類が、端末にデータ化されているようだ。

玲華は暫しその内容に目を通したが直ぐにタブレットを加納に返した。承認画面に彼女の名前は無い。どうやら、承認するつもりはないらしい。

「……宜しいのですか?」

「…ええ。役員やワルスラーンには未だアマゾンの脅威を信じない者も数多くいるわ。明後日の会議で、その事についてはっきり言わないといけないわね。…そういえば、他の駆除班に、調査班や清掃班は?」

「はい、現在、入学式が始まって他の学生からの目が届いていない時間を見計らって、２４時間前に輸送機で現地へ向かいました。」

「そう…。予定通りならもう着いているわね。〝Ｈ〟が彼らに合流出来たなら大丈夫ね。でも…。」

「でも?」

「…協力者が管理しているアマゾンも合流させるのよね?なら協力者に頼んでハヤトをそのアマゾンに会わせてあげましょう。」

「…危険ではありませんか?例のアマゾンは、レジスターも付けていなかった筈。然も、あの〝王家〟同様、自身がアマゾンだと言うことも知らされていないのですよ?…大丈夫なのですか?」

「ヴァリアントウイルスの抑制剤として自主的にレジスターの薬剤を投与させているから大丈夫だわ。其れに、なるべく早い段階で自分達のことを知り合っていた方がアマゾン駆除の際に連携も取りやすくなる。……問題なのは、どのタイミングで〝王家〟やそのアマゾンに、アマゾンや駆除班のことを伝えるか、ね…。場合によってはアマゾンのことが露呈することよりも最悪の事態も起こり得る可能性もあるのだから、考えものね…。」

そう言って玲華は、再び先程の映像と報告書に食い違いが無いか確認する為に、再びパソコンに向き直った。

制服に着替えた如月ハヤトはＰＤＡ?･着艦した際に空港(エアポート)にて支給された物品の一つだ。スマートフォンの様な携帯型デバイスで、学生証や身分証の役割は勿論、通行証にメール、電話などの通話通信機能、財布の代替にもなるなどの様々な機能を持ったスグレモノだ?･を片手に、入学式の会場を探していた。
「おっ、此処で良いのかなぁ…。」
やがて、ハヤトは目的地らしい建物の前に辿り着いた。建物の周りにはかなりの人だかりが出来ていた。
?･此処で間違いはなさそうだが、一応聞いとくか…。
そう考えたハヤトは、手始めに、近くにいた身長の高い金髪の青年に声をかけた。
「あのぉ～、入学式は此処で良いんですか…?･」
「ああ、そうだけど…。」
青年がハヤトに二の句を告げようとした、正にその時だった。
「ああっ⁉?･もしかして、如月ハヤトぉっ⁉?･」
橙がかった茶髪に大きなサイドテールの髪型をした、どう見ても身長から何から何までが小学生高学年程度にしか見えない女学生が、ハヤトを指しながら、金髪の青年を跳ね除けて大声でハヤトの名前を呼んだのだ。
おかげで周囲の人間達の視線と感心が、一斉にハヤト1人に集まる。
「うえっ⁉?･」
ハヤトは再び引きつったような悲鳴をあげ、直ぐさまその場から逃げようとしたが一気に歓声を上げて近づいてきた学生達に取り囲まれてしまう。
「反応数値が歴代1位ってキミかぁ！」
「マジ⁉?･本物⁉?･」
「なんか、結構、普通…。」
「サインくれる⁉?･」
矢継ぎ早に様々な感想や質問が乱れ飛ぶ。然しハヤトは、隙をついて身を屈めて四つん這いになりながら手足を踏まれぬよう、学生達の

足元を這いながら包囲網を突破した。

「ふぅ…。」

人集りを見ながら建物の陰に隠れたハヤトは安堵した。ハンドレッドの驚異的な反応数値を叩き出してからというもの、人前に出ただけでずっとこのような状況が続いている。ハヤトは思った、俺は仲間が好きでも皆と一緒に静かに過ごしたいだけなんだ、ただ反応数値云々で特別扱いなんてして欲しくないしそもそも俺は皆に持て囃される程高尚な存在でもない…。

そう考えて沈んでいた矢先だった。

「ハヤトォ〜!!?」

突然、目の前から現れた何者かが、ハヤトに飛びついてきた。あまりにも突然過ぎた為、咄嗟に躱そうにも躱せず、ハヤトは思わず「うわぁっ!!?」と叫び声を漏らしてしまったうえにそのまま地面に押し倒されてしまった。

「会いたかったよぉ〜、ハヤト〜っ!!?」

自分の名前を呼んだ鈴を鳴らすかの様な美しい声と、突然の出来事に戸惑いながら、そして、地面に倒れ込んだ際の痛みに堪えながら、ハヤトは目の前の人物に訊いた。

「いたたたた…、なんなんだよ、お前…?」

すると、自分の真上に乗っかっている人物は倒れたハヤトの顔を覗き込んできた。

透き通る程の碧い瞳に、透明感のある白い肌。顔つきは程良く整っ

ていてその辺りのモデルや人形とは比較にならない程可愛らしく、艶のあるシルバーグレーの髪は後ろの青いリボンで綺麗に纏められているらしい。身体は随分と華奢で、然も柔らかい。だが、

（…え？女？いや、だが其れなら何で武芸科の男子制服を着てんだ…？というか、此奴に会った覚えなんて、あるか…？…いや、ある。記憶に無いが確かにある。だが、何処でだ…？）

そう、件の人物は武芸科男子制服を着ていた。どう見ても女性なのになぁ、とハヤトは考えた。その上この人物から何やら妙な「懐かしさ」を感じられる。だがハヤトには其れが何なのかは分からなかった。もっと考えてみようと考えたハヤトだったが、其れよりも大事な項目が目の前にぶら下がっているから其方を優先しようと考え、取り敢えずは男だと考えて、残りの疑問は頭の片隅にへと追いやった。

「…うんうん、やっぱりハヤトだ♡」

目の前の男子生徒はハヤトの顔を覗き込んで頷いている。ハヤトは、やっぱり此奴は何処かで俺に会ったらしいな、と考えながらも、再び目の前の彼（？）に訊いた。

「お前、俺と何処かで…？」

ハヤトの台詞は其れ以上は続かなかった。目の前の人物が自分から言い出した為だ。

「僕はエミール・エミール・クロスフォード‼？ハヤトと同じ、リトルガーデンの新入生だよ‼？宜しく！」

そのエミールの笑みを見たハヤトは、同じ男にしては笑顔が可愛いな、と考えつつも、同時に妙な「懐かしさ」も感じて暫く顔を赤らめつつも、何とか口を開いた。

「ええ…？……よ、宜しく……。」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

…そう、此れが全ての始まりだった。この時ハヤトは、ヴァリアントは愚か、〃アマゾン〃のことまで、セカンドアタックの時の記憶以外は全て知っていた。妹に黙ってまで、害虫駆除のアルバイトと言ってアマゾンを狩ってもいた…、真実を知っているようで、実は何も知らなかった僕とは大違いだ。

けど…、「〃真実〃という大海を知らずに、水槽の中にいた僕」は、この時を持って終わりを告げたのは確かだった。

そして、其々の運命も、此処から狂い出したことも…。

「檻の中の獣達」が目覚め出す。其れはこの僕も、ハヤト達も例外ではなかった。まだ目覚めるのに時間がかかり、例え檻の中に封じ込めることが出来ても、最早眠らせることはもう出来ない。いや、もう出来なくなっていた。

檻の中の獣達が、目覚めを告げるカウントダウンは、既に始まっていた。もう、誰にも止められなかった。

誰にも…。

宣戦布告／WAR DECLARATION OF AMAZONS

ハヤトが入学式でエミール・クロスフォード達と邂逅していた頃、発着場に一機の大型輸送機が降り立った。

機体に「野座間製薬」と書かれた其れは、人知れずリトルガーデンの発着場に降下した。そして、そのタラップから、ぞろぞろと白い防護服姿の人間達が現れ始めた。

彼らこそ、如月ハヤトが所属している野座間製薬の子会社である害虫害獣駆除業者、「ノザマペストンサービス」だった。

やがて、多くの防護服の人間達が降りると、その奥から野座間製薬のマークを付け、屋根に小さなスピーカーを載せた一台のバンが現れた。

バンは、輸送機から降りると、そのまま他の防護服の集団が乗り込んだ、リトルガーデン側の迎えのトラックの後に続いた。

だが、その中の誰一人として空港（エアポート）へと向かう船団（コンボイ）を見つめる者がいたことは気づかなかった。その人物は、リトルガーデンへと見学に来ていたワルスラーン社や野座間製薬の株主、各国政府の官僚や軍人の一団の中にいた。見た目は銀髪のロングヘアーで、ゴスロリ風のファッションに身を包んだ、見た目が子供にしか見えなさそうな少女だった。

そんな彼らの直ぐ近くを、ノザマペストンサービスのコンボイが通り過ぎる。エアポートにその船団が到着したのを見届けると、最後尾にいた彼女は、気づかれぬよう一団から抜け出し、エアポートに到着し、最後尾で停車していたバンの屋根に向かって、隠し持っていたパチンコで何かを打ち出した。物体はそのまま放物線を描いてバンの屋根の上にくっついた。四角い箱のような物体で、中央にあるランプが青く点滅している。

／／／／／／／／／／／／／／／／

その頃、何処かのビルの一室の、オリエンタルで生活感溢れるその

部屋に、その赤毛の少女はこたつテーブルの中で眠っていた。こたつテーブルには携帯や昨日の夕飯の後の食器やトニックウォーターの空き瓶などが置かれている。
その時、突然携帯のバイブ音が鳴り響き、少女は眠りから覚めなければならなくなった。
携帯を手に取り、たった今届いたメールの内容と、其処に映し出されたリトルガーデンの地図と座標を確認すると、少女は、こたつテーブルの上にあった、まだ瓶の中に残っていたトニックウォーターを全て飲み干し、棚の角に足の小指をぶつけて悶えながらも、欠伸をして玄関を通り過ぎると、そのまま直ぐそばのビルの屋上へと繋がる階段を上っていった。
屋上には、鶏小屋や鶏を放し飼いにする際に荒らされないよう温室小屋となっている菜園などがあった。少女は迷わず、何時ものように鶏小屋の扉を開けた。中の鶏達はかなり驚いて翼をばたつかせ、羽を飛び散らせたが、構うことなく少女は目当ての卵を４個程手に取る。
そして少女はまた来た道を戻ろうと階段へと繋がる扉へ向かう。が、其処で彼女は卵を一個落としてしまった。
だが、分厚い緑色の塗装が施されたコンクリートの上に、グシャリと半ば潰れかかった卵を見た赤毛の少女は、気にすることなく、そのまま割れた卵を拾い上げて扉の奥へと消えていった…。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「すまない、ハヤト。私が大声を出したせいで…。」
「そうだレイティア。反省しろよ?」
「⁉?フリッツ!良い加減、子供扱いするなと言っているだろう⁉?頭を撫でるな‼?」
「丁度良いところに頭があるのが悪いんだ。」
そういって、金髪の青年が小さな少女の頭を叩いて、撫で回した。
ハヤトとエミールの２人は、入学式会場のある建物内の講堂への入り口で、先程の金髪の青年と、同じく大声でハヤトの名前を呼んでハ

ヤトが周りから注目されてしまう原因を作ってしまった、橙がかった茶髪のサイドテールで、小学生に見間違えられそうな程の身長？ハヤトには其れが、笑点でよく見かける、赤服の座布団運びの落語家を思わせた？とスタイルの、少年のような性格をした少女と出会っていた。

美しい金髪に長身、甘いマスクの青年が、〝フリッツ・グランツ〟。

対する橙茶髪の少女が、〝レイティア・サンテミリオン〟。

何方もリベリア合衆国出身の武芸科一年生だった。２人は、幼馴染らしく？然しレイティアだけは、「ただの腐れ縁」だと必死に否定している？、とても仲が良さ気だった。聞いた話では、フリッツは今年の武芸科男子の一年代表を務めるとのことだった。

「２人は幼馴染なんだってさ～♪ホンット、仲良いよね～♪」

そう言って、エミールが嬉しそうにハヤトの腕に抱きつく。男に抱きつかれて、ハヤトは少し狼狽えた。

「あ、ああ…。」

其れを見たフリッツとレイティアはハヤトにこう言った。

「お前達こそ、あったばかりだと言うのに仲が良いな。」

「うむ。とても男同士とは思えんくらいだ。」

「ええっ⁉？」

ハヤト思わずギクリと身体を震わせた。まさか、ホモと思われた？

「エヘッ、そうかなぁ～？どうしよう、ハヤトぉ♪？」

だが其れでも御構い無しにエミールが嬉しそうに言ってくる。ハヤトは戸惑いながらも、果たして俺の此れから先の学園生活は大丈夫なのか？、と考えた。

／／／

列した。講堂の中はまるでオペラ座のような雰囲気と広さを誇っていた。
整列が終わると直ぐさま式典が始まった。先ずは舞台袖から現れた、凛々しい瞳をした緑がかったポニーテールの女性と、赤縁のアンダーリムの眼鏡を掛けた、真面目そうなショートカットの女性からの挨拶だった。何方も武芸科の制服を着用し、年齢もハヤト達に近く、まだ少女と呼んでも過言ではなかったが、何処かベテランを思わせる雰囲気を放っていることや、そもそも武芸科の制服のカラーが、ハヤト達のオリーブドラブのタイプではなく、南の島の海を思わせる鮮やかな紺色からして、普通の生徒ではないのは明らかであった。
「新入生の皆さん、入学おめでとうございます。司会を務めます、リトルガーデン武芸科二年、生徒会副会長のエリカ・キャンドルです。」
「同じく、リディ・スタインバーグだ。では先ず、このリトルガーデンの艦長であり、生徒会会長のクレア・ハーヴェイ様より、ご挨拶がある。」
２人の副会長、エリカとリディがそう切り出すと、ざわついていた講堂内はあっと言う間に静まり返った。
やがて、その静まり返った講堂内に、ハイヒールの音がこだまし始めた。音は段々近づいていき、遂にそのハイヒールの音源が姿を現した。
「あれが…、生徒会長…？」
ハヤトは神妙な面持ちで、彼女を見た。縦巻きにカールしたブロンドの髪を左右の耳元から垂らした、如何にもお嬢様然としつつも、何処か厳しさを湛えた、美しい少女。
その女性こそが、クレア・ハーヴェイだった。
「ああ、女王（クイーン）クレア・ハーヴェイだ。」
フリッツがそう補足した。やがて壇上についたクレアが、マイクに向かって此れから何を語るのかと、誰もが固唾を飲んで見守り、聞き入ろうとしていた時だった。
いきなり、出入り口の扉が勢いよく開かれた。

「すみませんっ‼?」
「遅れて申し訳ありません‼?」

聞き覚えのある、二つのソプラノが、講堂内に木霊した。舞台上のクレアは勿論のこと、講堂内にいる全員の視線が講堂の入り口へと殺到する。見ると其れは、ハヤトがエアポートに到着した際に、ハヤトを歓迎する垂れ幕を掲げた、東洋人らしい顔立ちの、あの2人の少女達だった。

「あの2人って、確か…。」

ハヤトは、エアポートに到着する寸前まで、彼女達が自分を探しているのを知っていたが、あれから入学式に遅れてまで自分を探し続けてくれていたことに、罪悪感を覚えた。

(ずっと俺を探してくれてたんだ…。ありがとう…、そして、ごめんな。こんな俺の所為で…。俺を探してくれてたのに、それなのに俺は…。もう、「仲間思い」なんて、口が裂けても言えねぇな…。)

こんなことになるくらいなら一緒に会って会場に行っておけば良かった。そう考えた時だった。

「…入学式に遅れるとは。良い度胸をしていますわね。」

クレア・ハーヴェイの、冷たく怒気を孕んだ声が講堂内に響いた。
「す、すみませんっ‼?」
「エアポートまで如月君を迎えに行っていて…、如月君が見つからなくて、其れで…。」

「言い訳はよせ！」
副会長のリディが一喝した。エアポートに行っていたことを説明していた、後ろ髪で三つ編みにした黒髪の少女は、その一喝で小さくなる。
「お前達の探していた如月ハヤトなら、其処にいる。」
そういって、リディはハヤトのいる席に向かって指をさした。
２人の少女は、失望したような面持ちでハヤトを見つめた。

ハヤトは、そんな彼女達から顔を逸らした。自分が悪いのは分かってはいるが、流石にその視線だけは耐え難かった。
「ノア・シェルダン。リュウ・シュエメイ。」

クレアが２人の少女、ノア・シェルダンとリュウ・シュエメイの名を呼んだ。
「このリトルガーデンでは、規律を守れない者に居場所はありません。よって…。」
次の瞬間、クレアは衝撃的な言葉を口にした。
「直ぐに荷物をまとめて、出て行きなさい。」

栗色のロングヘアーの少女、ノア・シェルダンと、長い黒髪を三つ編みにした少女、リュウ・シュエメイの２人の顔が真っ青になる。同時に、先程まで静かだった講堂内が慌ただしくなる。

ハヤトは焦った。不味い、理由は分からないがこのままではあの２人が俺の所為でこのリトルガーデンから追放されてしまう。何とかしなくては。そう考えた時、あの夢の光景が蘇ってきた。あの夢の中で、俺はあの少女を救えなかった。今この状況も、有る意味似たようなものだ。もうあんなのは２度とごめんだ。そう考えて、ハヤトは勢いよく立ち上がった。

「あのっ‼?」
「…そーいうのは横暴なんじゃないかなっ‼?」
が。
ハヤトが言葉を紡ぐより先に、エミールも立ち上がって、やや喧嘩腰にクレア達に向かって詰問した。
「エミール⁉?どうして?此れは俺の問題なんだぞ、だからお前は…。」
だがエミールは御構い無しに続けた。
「生徒会長だか何だか知らないけど、一度のミスで退学を言い渡すなんて、可哀想じゃないか‼?」
「おい!エミール‼?」
耐えかねたハヤトは、エミールを叱咤した。此れ以上関係の無いエミールのような人間を巻き込む訳にはいかなかった。
「止めないでよハヤト!僕はああやって権力を振るう奴が許せないんだ‼?」
「いいや、絶対に止める。そもそもお前が言う必要なんて無いだろ!あの2人は、俺の所為で入学式に遅れて来たんだ‼?其れも、ずっとこの俺を探して。なのに俺は、あの2人がずっと探していただなんて気づきもしないどころかこれっぽっちも考えもせずに、自分のことしか考えずにこっちに来ちまった。だがその俺の所為で、あの2人が退学にならなきゃいけないなんて、この俺が納得する訳にはいかないんだよっ…‼?」
「ハ、ハヤト…。」
「エミール、頼む。頼むから此れは俺に言わせてくれ。此れは、彼女達やお前よりも、俺自身の問題なんだ。だから…。」

ハヤトは其処で口を噤んだ。何を言えばいいのか、やり場のない怒りが邪魔をして思うように口が開けない。
「お前達！場をわきまえろ‼？」
その時、リディの怒号が飛んだ。
「すみません。…でもエミールの言う通りだ。入学式に遅れて来ただけで退学というのは、流石にどうかと思うのですが…。」
ハヤトは、立ったまま率直に自らの意見を述べた。遅刻しただけであの２人に退学処分を言い渡す程だ、余程重大なことなのだろう。
「…如月ハヤト。」

少しばかりの沈黙の後、クレア・ハーヴェイが口を開いた。
「いえ。この場にいる全員に言っておきます。貴方方はただの学生ではありません。命をかけてサベージと闘う、武芸者（スレイヤー）の卵です。戦場では、たった一人の、一度のミスが致命傷となって、部隊が全滅することもあります。回数の問題ではありません。命令違反は死に直結するのです。」
確かにそうだ、命令とは絶対に従わねばならないもの。自分だってそうだ、自分達ノザマペストンサービス駆除班の上司で、野座間製薬で特殊研究開発本部長を務める水澤玲華の厳命により、他の駆除班メンバーに「アマゾン」のことを伝えることだけは止められている。だが此れはそんな次元の話ではない。そのうえ戦場だからといって、必ずしも命令が絶対であるという訳ではない。戦場とは、常に状況が変わるのだ。２年間アマゾン狩りを経験した自分なら分かる。どれだけ命令を固持しても、周りまではそうはいかない。だから、負けじとハヤトはこう言った。
「ですが、戦場とは常に状況が変わるもの。自分達は良くても、周りの環境や敵までは其れに合わせたり、待ってくれたりはくれません。たった一つの命令を固辞し過ぎた所為で、多くの犠牲を払うことに

なった話は、良く耳にしますが？」

再び、講堂内がざわつき始めた。其れはそうだろう、「あの」如月ハヤトが、リトルガーデン生徒会長にして、〝クイーン〟クレア・ハーヴェイに刃向かったのだ。誰もが固唾を飲んだ。エミールも、「ハヤト…。」と、不安げにハヤトを見上げる。

「良い加減になさい、如月ハヤト！武芸科のクイーンであるクレア様の命令は絶対です。」

エリカ・キャンドルの檄が飛んだ。だがハヤトは続けた。

「…分かりました、では其処まで仰られるのなら退学処分には従いましょう。でも、退学するは彼女達じゃない…。」

一つ間を空けて、ハヤトは其れを口にした。

「…この俺だ。」

再び、講堂内に衝撃が走った。あの、如月ハヤトが、ハンドレッド反応数値が歴代1位の如月ハヤトが、たった2人の少女の為に、リトルガーデンへの入学を拒否するというのだ。隣のフリッツやレイティアも、呆れたような声をあげる。

「そんな⁉？ハヤト、何も其処までしなくても…。」

当然ながら、エミールが反論してきた。だがハヤトは、

「言っただろう。此れは俺の問題だ。」

そう言ってエミールを黙らせ、クレアへと向き直った。

「ですから、その代わり是非とも彼女達や、勿論エミールにも寛大な処置をお願いしたいのです。其れで宜しいでしょう、生徒会長。」

すかさず、リディが声を荒げた。

「如月ハヤト、良い加減立場をわきまえろ！」

だが、その時、クレアが手を挙げて荒ぶるリディを宥めた。

「…良いでしょう、如月ハヤト。貴方のその心意気に免じて、彼女達の退学処分は取り消しましょう。」

　またしても、会場内が騒ぎ出した。当然、彼女の隣にいた、リディとエリカの２人も。

「会長！」

「幾ら何でも其れは…‼？」

「ですが。」

　クレアがその場を制すように口を開いた。再び、ハヤトとクレアに注目が集まる。

「…反応数値の件はさることながら、仲間を思い遣るその心意気に免じて、貴方にこのリトルガーデンに残るチャンスを与えましょう。如月ハヤト…、」

　一拍を置いてクレアが放った言葉は、会場全体を騒然とさせるものだった。其れも、リトルガーデン創立以来の衝撃であったと言っても、過言ではなかった。其れは…、

「…私、クレア・ハーヴェイは、貴方に決闘（デュエル）を申し込みますわ。」

その場にいた全員は、最初クレアが何を言っているのか分からなかった。が、クレアが突如提案してきた内容に、会場が騒ぎ出した。まだ、一通りの適正検査や試験を受けただけで、当然大会一つすら出ていない新入生が、いきなり決闘（デュエル）に参加するというのは、産まれたばかりの子鹿（バンビ）が２ｔトラックに闘いを挑むにも等しいものだからだ。ハヤトやエミール達を含めた、会場の全員が唖然とする中、クレアはその対決内容を続けた。

「私に勝てたら、貴方の退学処分を取り消しましょう。日時は明日の午後、場所はメインコロシアムですわ。」

ハヤトはどう言えばいいのか、全く検討もつかなかった。決闘（デュエル）だって？新入生相手にか？何の冗談だ、タチの悪い抜き打ちテストの類のつもりか？

回答に戸惑っていると、リディが代弁するかのようにクレアに問うた。

「クレア様、正気ですか？本当にそのようなことを申されるのなら私は貴方の人となりを見直さねばならなくなるのですが…。」

「何を仰いますの？もちろん、本気ですわよ。エリカもリディも、わたくしの記録を塗り替え、歴代第１位の反応数値を持つ、彼の実力を見てみたいでしょう？勿論、ここに居る新入生の全員も。其れに、新入生達はわたくし達生徒会の実力を間近で目にすることも出来る、とてもいい機会ですわ。どのみち、そのような場を近々設ける予定ではあ

りましたからね…。其れとリディ、後で部屋に来なさい。」
そう言い終わると、再びクレアはハヤトに向き直った。
「どうしますの？如月ハヤト。折角の挽回のチャンスです、受けますか、受けませんか？」

ハヤトは思案した。現在の自分は2人の少女、ノア・シェルダンとリュウ・シュエメイの2人の処分を被って、退学の危機にある。そんなことにでもなれば、駆除班と合流出来ないばかりか、妹カレンの治療も出来ず、はたまたこのリトルガーデンは愚か世界中にアマゾンが溢れてしまうことにもなる。其れに、万一受けずに退学を言い渡されたが野座間製薬側からの圧力によってリトルガーデンに残れたとしても、今度はあの勘の鋭そうなリトルガーデン生徒会のメンバーが黙っていない筈だ。そうなれば、最悪アマゾンのことが露呈してしまう可能性もある。
（……背に腹は変えられないか…、全く、面倒なことになったなぁ……）

そして、考えた上で望ましい答えを出した。

「……受けます。この決闘（デュエル）、受けますよ。」

ハヤトは決意した。最早なるようにしかならないなら其れ迄だ、相手が喧嘩を売って来たなら此方も其れを買ってやろう。
「そんなっ！ハヤト、本当に良いの⁉？何だったら僕が身代わりに…。」
エミールはハヤトにそう食って掛かった。余程彼を退学にさせた

くないらしい。その様子に、ハヤトは少しばかり、元気づけられた。
（気に入られてるな…。可愛い割にやたらと喧嘩早いし、余計な事を言うし…。何考えてるか知らないけど、つくづく何処か憎めない不思議な奴なんだよな…。）

そう考えて、ハヤトはエミールを諭した。

「エミール、そう言ってくれるのは嬉しい。俺の為に本気なって言えるのは本当に嬉しいよ。けど、此れは俺の問題なんだ。俺の問題は俺自身の手でケリをつけなきゃいけない。ただでさえまだ出会ったばかりのお前に、こんなことを押しつけるなんて、出来ないよ…。けじめは、自分でつけないといけないから…。」
「ハヤト……、分かった。なら、其処まで言うならもうこの件については何も言わないよ。けどサポートくらいはさせてよ。僕も、ある程度ハンドレッドについて予習はしてるから、キミと練習することくらいなら出来る筈だからさ。其れで良いよね、生徒会長！」

エミールが、壇上のクレアに向き直った。
「……良いでしょう、其れくらいはハンデとして許可します。では…、2人とも、この条件で宜しいですわね？」
「ええ。」
「あったりまえだよ！」
「ああっ、おい!!?」
再びエミールがクレアにタメ口を聞いた事にハヤトが怒るのを尻目にして、クレアは隣にいたリディ・スタインバーグとエリカ・キャンドルを見やりながら、
「以上で、この件についての話題は終わりとします。2人は入学式の後に研究所（ラボ）に向かい、専用ハンドレッドを担当者から受け取るように。担当者には私が直接伝えておきます。如月ハヤト、貴方と戦える

こと、楽しみにしていますわ…。…ではエリカ、続きを。」
「はっ、はい！では皆さん、静粛に！入学式はまだ途中ですので、私から校舎の説明及び今後のスケジュールについて話をさせて頂きます…、」

簡素な説明をエリカがしている中、リディは顔や視線を新入生側に向けたまま、クレアに耳打ちした。
「何故あのような事を…。退学にするなら退学にすると如何して…。」
「あの男、ただハンドレッドの反応数値が高いだけではありませんわ。経歴にも、セカンドアタック以降の記録にやや不自然な点もあるでしょう？その上、彼がかつてアルバイトをしていたという企業は、貴方も知っている筈よ…。」
リディは其処で、ハッとしたような顔になる。
「…〝ノザマペストンサービス〟…。」
「そう。あの野座間製薬の下請けである、正体不明の害虫駆除業者ですわ。今日彼らがこのリトルガーデンに本拠地を移すとの連絡を、この前受け取りましたわよね？」
「ええ。我々としては、最初は業務内容が不明な企業の、此方への移転には賛成出来ないと反対しましたが、野座間側からの圧力により、仕方なく…。まさか、彼がその野座間製薬側からの手先だと…？」
「理由はどうあれ確かめねばなりませんわ。彼が我々にとって有益かどうか…。…私の気の所為であって欲しいのですが、彼の目や雰囲気から、並大抵のものではないものを感じ取りました。アレは、一介の人間にしては異常ですわ。恐らく、幾分か死地を潜り抜けている…。其れを確かめる為にも、今回の件を利用したのですわ。」
「そんな…、幾ら何でも危険過ぎます。良ければ私が…。」
「その必要はありませんわ。此れは様々な考えを巡らせた結果です。このリトルガーデンを治める身、生徒会長である以上、リトルガーデンの平和の為にも私がやらねばなりません。全ては、〝ノブレス・オブリージュ〟の名の下に…。」
クレアは、観客席にいるハヤトとエミールを見た。相変わらず、2

人揃って腕を組んでいる。
「…ですからリディ、万一の場合はお願い致しますわ。」
「……了解致しました。」
溜息をついて、リディはクレアの命令に従う意思を伝えた。
「…其れとリディ。先程の件と今の溜息、聞き捨てなりませんわね。後でわたくしの部屋に来なさい。宜しいですわね？」
「も、申し訳ありません…／／／／。」
顔を赤らめながら、リディはクレアに謝罪した。

／／／／

（危なかった…。逃げ出して以来、ずっと、〝戦え、戦え〟、〝喰え、喰え〟って…。でも、きっと大丈夫。如月君達が居て、〝彼女〟がいる。だからきっと、生きていけるよ！絶対に、〝人間〟として、生きていけるよ…、きっと、きっと…‼？）

入学式が終わった後、ハヤト達は一先ず校内全体を把握したいというフリッツやレイティア、そして自分たちに感謝して来、謝罪してきたノア達？もちろん、決闘（デュエル）は始まってすらいなければどうなるかもわからないから、まだ感謝したり謝罪するのはいささか早すぎるとハヤトは言おうとしたが、エミールが自信満々に、ハヤトなら大丈夫だと言い切り、彼女たちを安心させてしまった。つくづく、心配な奴だ？と別れ、武芸科校舎の、研究所（ラボ）のある棟へと続く通路を歩いていた。あのような啖呵を切った手前、当事者であるハヤトは異様に落ち着かない気分に見舞われていた。そういう点で言えば、先ほどからやや勝気そうな雰囲気を醸し出しているエミールとは大違いだった。

その時、ふとハヤトはエミールにこう訊いた。其れは、エミールがハヤトのサポートを願い出た時からずっと気になっていたことだった。

「…なあ、良いのか？こんな俺の為に、ラボへの案内どころか訓練にまで付き合いたいだなんて…。」

するとエミールは、振り返りざまにあどけない笑みを浮かべた。

「何言ってるんだよハヤト、こんなのお互いさまじゃないか。ノア達だけじゃなく僕のことまで助けてくれたんだし。其れに、〝僕の〟ハヤトが入学初日で退学の危機に陥っているんだ、手を差し伸べない訳にはいかないよ。」

そうエミールが意気込むのを聞いたハヤトは、若干悲喜交々とした微妙そうな表情を浮かべ、溜息を吐いた。

やがて通路を進み、２人は地下にあるラボへと続くエレベーターへと入った。エミールに急かされて急いでその六角形の箱の中に入ったハヤトは、エレベーターの扉が閉じられ、地下一階へと下降していく間にエミールからある事を聞かされた。

其れは、此れから向かうラボで会うことになっているのはこのリトルガーデンの技術主任（メインテクノロジスト）であり、〝彼の友人〟でもある女性という話

だった。
「メインテクノロジスト？」
「このラボだけじゃなくて、リトルガーデン全体のね。彼女はハンドレッドの主任研究員なんだ。」
「へえ…。」
そんな会話をする内に、エレベーターは地下一階のラボの扉の前に着いた。この奥に、件のリトルガーデン主任研究員がいる。
ハヤトは身を引き締めた。何故なら出発前にワルスラーンを通じて聞かされた野座間製薬側からの通達では、協力者がそのようなラボに所属している研究者であるという話だったからだ。
？…ってことは、若しかしたら今後の駆除活動の進展にも大きく関わってくるってことか。然も…。
駆除班に合流させることが予定されている、〝例のアマゾン〟。その所在を知っているのは其処の研究者だと聞く。もしかしたら見当違いかもしれないが、万一その研究者が、今回の主任研究員だったら…。
？こりゃあどのみち、身を引き締めといたが良いな…。
そう考えたハヤトは、制服のネクタイを締めながら今にも開かれようとしているエレベーターの扉へと、エミールと共に一歩踏み出した。
／／／

件の主任研究員に会うことは出来たものの、その研究者の様相に思わず面食らった。

簡単に言えば、見た目がかなり幼い。

蓋を開けてみれば何のことはない、見た目があのレイティア・サンテミリオンのように、身長が低く?身に付けている白衣が地面を擦っている位だから、若しかしたらレイティアよりも身長は低いかもしれない?、かなりの童顔だったのだ。其れに加え、煙草の代わりに咥えているチュッパチャプスも、その姿をより一層子供のように見えさせていた。然し此れが既に婚姻適齢期を迎えているというのだから尚更驚かされた。やり手のクール系美人研究者を予想していたハヤトは、己の予想に反したその見た目に圧倒されて思わず頼りない返事をしてしまった。

(全く…。エミールといい、レイティアといい、この人といい、リトルガーデンには〝ビックリ人間〟が多いな…。)

何処その、「目か、耳から牛乳を出せる人の話」を思い出しながらも、「よ、宜しくお願…、」と手を差し伸べて次の言葉を発しようとした時だった。

突然シャロの隣に立っていた、ちんどん屋を思わせる奇抜なデザインのメイド服を着た女性が「くんくんくんくん…」、とハヤトから匂いを嗅ぎ始めた。

思わずハヤトは身じろぎしてしまった。アマゾンである都合上、匂いを嗅がれることにはやや抵抗があった。

やがて、匂いを嗅ぎ終わった女性は、

「皇国ヤマトの出身の方なのに、おショウユの匂いがしないのですね〜!」

と、どう返答したら良いのか分からない感想をハヤトに向かって述べた。取り敢えずハヤトは、

「ふ、普通はしないものですよ…。」
とだけは返すことにはした。やっぱり、ビックリ人間や変わった人が多いんだな…、とハヤトが丁度そう考えた時に、シャロが大笑いした。
「ハハハハハ…、変な奴だと思っただろうけど、こう見えて彼女は僕の優秀な助手なんだよ。」
すると、助手と呼ばれたそのメイド服の女性は軽く会釈した。
「はじめまして、メイメイです。」
「宜しく…。」
ハヤトが若干顔を引き攣らせながら挨拶を交わすと、今度はエミールが補足をした。
「そしてシャロは、〝神童〟と呼ばれる程の天才なんだ。」
「へえ…。」
「その呼び方は侮辱かぁい？私は此れでも適齢期なんだよ。エミｒ…」
チュッパチャプスを咥え直しながら話をしようとしたシャロだったが、其処から先は紡がれることはなかった。何故なら、
「シャあぁあロおぉぉぉぉ…？僕はエミぃールだよぉ～…？わぁすれたのかなぁ～…？」
エミールが顔を見せられないくらいの「恐ろしいくらい猛悪そうな笑顔」を浮かべてシャロの両頬を摘み上げた。
対するシャロは、
「いぎぎ…、しょ（そ）、しょうらったねぇ（たねぇ）…、えみー（エミー）、ぐ（ル）…。」
とだけ返して、それ以上その話題については言わなかった。ハヤトは、その点に何処か違和感を覚えたが、其れよりも大事な項目が自分に掛かっていることに気がついて其方に注力した為、余り深くは考えなかった。

／／／

気を取り直して、再びデスクについたシャロは、エミールに抓られた頬をさすりながら開口一番にこう言った。
「流石に耳が早いね、シャロ。」
「会長からの直通メッセージもあるが、殆どは〝ＬｉＺＡ〟が教えてくれたのさ。」
「ＬｉＺＡ？」
此処でハヤトは、聞き慣れない単語を聞いた。確か、リトルガーデンへ向かう前に聞いた気もしなかったが…。
「このリトルガーデンの全てをコントロールする、自律型コンピュータさ。意思表示をすることもあるんだよ。」
ハヤトの疑問に答えるかのように、シャロが奥の樹木のような翠色の、半透明の巨大な柱を見上げながら言った。
「此れが…、〝ＬｉＺＡ〟、なんですか…？」
ハヤトがそう訊くと、突然、
［ＥＸＡＣＴＬＹ］
という女性型電子音声と共に、部屋の内部のディスプレイ全てが翠色に変化し、その淡白な英単語を表示した。ハヤトは其れを見て、変な奴も多いけど、やっぱりなんだかんだで？ＰＤＡにしろ、セキュリティなどにしろ？凄いな、リトルガーデンは…、と考えた。
？…しかし、其れにしてもこんなにも凄いのに、〝アマゾン虫〟が学生やリトルガーデンのクルーとして侵入を許してしまっているってことは、やっぱり俺みたいに同じアマゾンでもない限り、このＬｉＺＡであっても〝虫〟を見抜くのはかなり難しいってことか…。
ハヤトがそう考えていた時、はと、思い出したようにシャロが声を上げた。
「ああ、そうだそうだＬｉＺＡの説明で忘れるところだった。メイメイ、アレを。」
「はいですぅ！」
するとメイメイが何処かから、何やらワインレッドカラーの、ミョ

ウバンの結晶のような手の平サイズの物体を持って来て、其れをシャロに渡した。
　シャロは其れを手にすると、其れをハヤトの前に掲げて言った。
「これが、ハヤト君のハンドレッドだ。まあ取り敢えず、渡す前に説明しておこう。」
　言うとシャロは、デスクのパネルを操作して、モニターに生徒会メンバーの、とある日のサベージ駆除活動の内容を記録した映像を再生し始めた。
「まずハンドレッドとは、異種生命体サベージに対抗出来る、唯一の武器だ。然し扱えるのは、ヴァリアブルストーンに反応出来る限られた人間のみ。我々は彼らを〝武芸者（スレイヤー）〟と呼んでいる。ハンドレッドは、扱える人間によってその形状を変える。其れが百武装…、ハンドレッドのハンドレッドたる所以さ。」
　聞き入りつつも、ハヤトは生徒会メンバーの駆除活動の記録映像を目に穴が開くくらい見入っていた。サベージの真上に飛び掛かり、持っている巨大なサーベル型のハンドレッドで攻撃し、サベージを撃破する副会長のリディ・スタインバーグの姿を見て、思わずハヤトは考えた。こんなにも実力があるのなら、何も駆除班を此方に派遣しなくてもいい筈なのに、と。そのことについては、自分もよく分からない。何故、並の人間よりも強い筈のスレイヤー達をアマゾン駆除に回そうとしないのだろうか？機密目的ならまだしも、其れならそういう仕事が専門のスレイヤーを担当にすればいい筈なのだ。なのに、アマゾンであり、スレイヤーの卵である自分以外は、皆そんなスレイヤーの能力を持たない人間たちばかり。何か、スレイヤーを関わらせたくない要因でも、あるのだろうか…？もしかしたら…。いや、或いは…。
「…其れで、クレア・ハーヴェイの場合は此れ。浮遊する砲台を自在に操る。…形態は、ドラグーンタイプさ。」
　不意に、シャロの説明と記録映像の中のクレアによってハヤトは現実に引き戻された。映像の中のクレアは、６つの菱形の砲台をサベージに向け、緑色の眩い閃光をその菱形の先端から発射し、一瞬でサベージを蜂の巣にしてしまった。ハヤトは思わず嘆息した。その光

景があまりにも圧倒的過ぎたからだ。
「此れが、ドラグーン、か…。」
「強いね…、流石に…。」
　エミールも、かなり引き締まった顔つきで言った。ハヤトがこのリトルガーデンから離れずに済む方法は、このドラグーンタイプの使い手たる、リトルガーデン最強のスレイヤー、クレア・ハーヴェイを明日に行われるデュエルで倒さねばならない。そう考えると、想定していた以上に、シビアな戦いになるやもしれぬ。２人の脳裏に、その考えが浮かんだ。だが、シャロは続けた。
「…ハンドレッドは形状も戦い方も人それぞれだ。…でも、究極の目的はただ一つ。…人々の平和を守ることさ。」
　そう言って、今までモニターに向かっていたシャロが、再びハヤト達に向き直った。
「…ハヤト君、君もハンドレッドを手にする以上、その役目を負うことになる。…覚悟はあるかい？」
　ワインレッドカラーのハンドレッドを掲げながら、シャロはハヤトに訊いた。
「…はい。」
　ハヤトはそう答えた。自分がリトルガーデンに来た理由は、復讐。そして何よりもチームと家族の為に。それならば、もう答えは一つしかない。
「…フフ、良い返事だ。」
　そう言ってシャロはデスクから立ち上がった。
「…さてと。取り敢えず話は以上だ。では今から一つ抑えておいた練習場に向かいたいところだが…、その前にもう一つハヤト君にだけ話しておきたいことがある。だからエミール。メイメイと一緒に少し外してはくれないかな？」
「え？でも…」
　エミールはその提案に少々嫌がるような仕草をした。するとシャロは手招きでエミールを呼び寄せると、彼の耳元に何かを囁き始めた。そのシャロの話を聞いたエミールは、何処か悲しそうで、やりた

くないことを無理やりさせられるのを嫌がるような顔をして、
「…分かった。」
とだけ答えて、メイメイに連れられて部屋の外へと向かっていった。

やがて、メイメイとエミールが部屋から出て行くと、再び登場シャロはデスクに着いた。
「さてと…、此れで人払いは出来た。後はメイメイとＬｉＺＡが何とかしてくれるから安心したまえ、如月ハヤト君…、いや…、」

間を置いて、再びシャロは口を開いた。だが其処で呼ばれた名前は、如月ハヤトの名前だけではなかった。

「…此処では、〝Ｈ〟と言うべきかな？其れとも、モグラのアマゾン、つまるところ〝□□□□□□□〟か、単にハヤト君と言うべきかな？」

ハヤトは結論づけた。やはり、この研究員こそが…。

「…ハヤトで、結構です。あの、つまり貴女が…。」
「そう、僕が〝協力者〟だよ、ハヤト君。」
？遂に、〝協力者〟とのご対面となるとはな…。
ハヤトは、〝協力者〟の方に顔を向けると、シャロは自分の眼鏡を中指で押した。

／／／

れを自分の腕に打つ。

ヴァリアントウイルスに感染してからずっと続けてきた行為。

自分や周りが危険に晒されないようにする為の措置。

だからこそ、やらねばならない。やらなければならない。だが…、

「なんかこれ…、嫌だな…。」

「えっ？」

「あ、ううん。何でもないよ。」

「そうですか。なら私はこれで。ハヤト様とシャロ様に此方の準備が整ったと伝えてきますね。」

そう言って、メイメイは更衣室から出て行った。

エミールは其れを見届けると、もそもそとヴァリアブルスーツに着替え始めた。だが長手袋をはめた後で、

「……あの薬、やっぱりもう打つの嫌だな……。」

そうポツリと、呟いた。

彼は別に注射が嫌な訳では無い。寧ろその方ならどれ程良かったことか…。

「あの薬を打つ度にあのイメージが出てくる…。何だろう…、見たことなんて一回も無いのに、凄くリアルで、なんか、とても不安になるから…。」

エミールが嫌がる理由、其れは薬を打った時や夢などで時折脳裏を過る、ある光景が原因だった。

暗い檻の中に呻き声を上げて蠢く、〝緑色の何か〟。

夢にしろ、幻影にしろ、イメージにしろ、其れは何時もぼやけて見えるせいで、其の正体が何なのかは彼にも分からない。少なくとも、人間でもサベージでも無いのは確かだった。其れでも姿がよく見えてこないことだけは、変わらなかった。

だが見えないことが逆に、彼をもどかしくさせていた。かといって、

「でも見えてしまったら、何だかもう自分が後戻り出来なくなる気がする…。」

見えたら、自分が自分で無くなりそうな気がする。彼にとっては、其れが堪らなく恐ろしく感じられた。だが一方で、其れを見てみたいのと、もう薬を打ちたくないと考える自分もいる。

「あーもうっ！煮え切らないなぁ～！折角ハヤトと練習するって言ってるんだ、こんなこと、今はいちいち考えてる暇なんて無いじゃないか⁉？何を迷ってるんだ、僕はっ⁉？…はあ、もう練習場に行かないとね…。」

そう言って、エミールは更衣室を後にした。

その、〝何か〟が、〝彼〟の中から目覚めようとしていて、最早完全に抑えることなど出来なくなっていたことなど、〝何か〟の正体を知らないこの時の〝彼〟は、予想することすら出来なかった…。

特別編

特別編第一弾、ネタバレ注意！主要キャラクター３人若干のネタバレ紹回（後投稿遅れてすいません）‼？

※ＣＡＵＴＩＯＮ：

アガッチャ??シャカリキシャカリキ??バットバット??シャカっとリキッとシャカリキスポーツ‼？

どうもどんぐりです♨？

今回は今後のアマゾンズハンドレッドに関する軽度のネタバレを含んでいます。よって、覚悟のある方は、此れより先は読んでも構いませんが、覚悟の無い方は今直ぐこのページを閉じることをお勧めします。いや、ホントに。

まあ、言う程情報開示して無いような気がしますが。

では、自己責任の下、ご覧ください。

因みに。

更新が遅れたこと、誠に申し訳ありません。本作もそうですが、何とかして他作品の投稿も急ぎますので、今後ともこのどんぐりめを宜しくお願い致します。

では、前置きはこのくらいに。覚悟のある方、どうぞこの先へお進み下さい。

／／／

エミール・クロスフォード／エミリア・ハーミット／仮面ライダーアマゾンオメガ…

仮面ライダーアマゾンオメガに変身する少年もとい少女。本作の主人公。ブリタニア連邦・グーデンブルグ王国出身。余りにも男離れした美しい容姿と銀髪が特徴。現在はリトルガーデン高等部武芸科1年生。同期でありルームメイトでもある如月ハヤトのことを過剰なまでに好いている。性格などは今のところ原作に準拠。

実は如月ハヤトが幼少期にて共に過ごした初恋の相手である少女で、本当の名はエミリア・ハーミット。後述の理由とハヤトへの一途な思い、そしてサベージに対する復讐を成し遂げるつもりでリトルガーデンへと入学した。

現時点では己の正体には気付いてはいないが、実は幼少期に起きた〝とある出来事〟により、ヴァリアントウイルスに感染し、ハンドレッドを使いこなすどころか、自身の身体に同化吸収し、体の一部としてハンドレッドを使ってしまうことができる特殊アマゾン、「コアトルス」と化してしまっている。然し、彼乃至は〝彼女〟の出自が出自により、この事実はワルスラーン及び野座間製薬両社により隠蔽されている。だが、あることがきっかけにより自らの正体と己の宿命（さだめ）に気づいてしまい、そして其れは、彼いや彼女自身や、仲間や、ひいては世界そのものを、本来歩んで行くべきであった道から永遠に踏み外すきっかけにもなってしまう。

そして何よりも、ただハヤトへの一途な思いやサベージに対する復讐、アマゾンへの憂いも相まって戦いに身を投じた彼女は、次第にその過酷な現実とさだめに翻弄されていく…。

果たして、〝彼女〟に待ち受ける運命や如何に…。

キャラクターモチーフは、原作版「アマゾンズ」主人公、水澤遥など。

如月ハヤト／モグラアマゾン…

原作版「ハンドレッド」主人公。ヤマト皇国出身。リトルガーデン高等部武芸科一年生。性格などは、概ね原作と同じ。本作ではエミールと同じく、幼少期に起きた出来事により彼もアマゾンと化してしまっている。本来のモグラアマゾンとしての基本的なスペックは原点とそう変わらないが、ヴァリアント覚醒状態では、本来のランクC～B程度の戦闘能力をランクA或いはSクラスにまで底上げし、またヴァリアント覚醒状態でも精神を維持することが出来る（但し、やはり安定しているのが定期的な投薬による維持の方が望ましいことに変わりはない）。また、上記のエミールと同じく、ハンドレッドを同化吸収し、己の体の一部にして戦うことが可能な「コアトルス」となっている。

原作と違い、エミールと立場が逆転した如月ハヤト。そんな彼は、現在ワルスラーン社と野座間製薬の実質的な共通下請けとなっている害虫駆除業者「ノザマペストンサービス」に所属し、〝アルバイト〟と称して日々自分の身体を元に戻す方法を探すことと、妹や施設の仲間を養う為に、また命じられているとはいえ大切なチームメイトである駆除班の戦力として、またチームメイトを守る為に、駆除班のメンバーとして研究所から逃げ出したアマゾンと戦っている。

キャラクターモチーフは、原作版「アマゾンズ」登場人物のマモル。

鷹山澪／仮面ライダーアマゾンアルファ…

仮面ライダーアマゾンアルファに変身する、エミール達と同年代に見える謎の美少女。何処かの飛行場跡の建物内に居を構え、其処で家主である〝とある少女〟と共に暮らしている。自分で処理（ころ）したものしか口にしないということを信条としており、アマゾンの食人本能を制御するアマゾンズレジスターを装着していないにもかかわらず食人行為を一切しない。かつては武芸者（スレイヤー）であり、そのうえリトルガーデン主任研究員、其れもシャーロット・ディマンディウスと同期の細胞物理学者であったらしい。果たして、彼女の目的は…。

キャラクターモチーフは、「新妹魔王の契約者」ヒロイン、成瀬澪。及び、原作版「アマゾンズ」登場人物、鷹山仁。

その容姿や口調などは、新妹魔王の契約者ヒロイン、成瀬澪そのままである。

反面、嗜好、性格などの面では鷹山仁であることから、容姿などの比率は１０：０だが、性格・嗜好面では２：８であるいわば「成瀬澪と鷹山仁のハイブリッド」といえるキャラクター。

何故本作でこのようなキャラクターが登場したのかという経緯については、

？本屋のラノベコーナーにて。

私「アマゾンアルファが誰にしたら良いか分からん♨？うーむ…」

↓丁度、「新妹魔王の契約者」の新刊が目に入る。

←

イラストレーターは、ハンドレッドと同じ大熊猫介先生。

←

主人公、東条刃更とその父迅の声優、中村悠一氏と藤原啓治氏は、近年ではマーベル・シネマティック・ユニバースシリーズにて其々キャプテンアメリカとアイアンマンの吹き替えをしているが、その一方で、「特命戦隊ゴーバスターズ」にて其々ビート・J・スタッグとチダ・ニックを演じている。

←

尚、そのゴーバスターズの岩崎　リュウジ（いわさき　リュウジ）／ブルーバスター役の馬場良馬氏がアマゾンズ、大滝竜介として出演??

←

然も刃更の父の名前も、「鷹山じん」と「東条じん」と、漢字こそ違えど読みが同じ??

←

此れ、いけるで（バァーン??

という感じですはい。何故敢えてヒロインである成瀬澪を選んだ

のかという点については、流石に赤毛がいるんだからカラーリングの赤がデフォなアルファに使わない訳にはいかないというのが理由です。後悔はしていません。はい。

今のところは此処までしか情報公開は出来ませんが、また機会があれば更新出来るとは思います。

では、また。